

寛永諸家譜

平氏十九冊之内
良文流

76

内閣文庫			
番號	和	20199	
冊數	186	(74)
函號	特	76	1





小幡

寛永諸家系圖傳

平氏

良文流

小幡

淺草文庫

● 氏行

安藝國乃人

村上天皇の由子具平親王十三代乃

孫名松則系が末子たり後々開東

都心三母方の伯父昌山が書子也
たろ是よりと平氏一政
小幡と号と之列本末此郡司と
法石常仙

崇行

右兼作 法石蓮心

多行

右兼尉 法石栄光

師行

右兼作 法石宗光

有行

右兼三郎 法石昭三

憲行けんぎょう

右兼みぎかねの作のつく 法名ほふな栄えい親おん

方行ほうぎょう

右兼みぎかねの三さん郎らう 法名ほふな栄えい嚴げん

憲澄けんじやう

右兼みぎかねの尉ゑう 法名ほふな栄えい隆りゆう

憲言けんげん

右兼みぎかねの尉ゑう 法名ほふな栄えい光くわう

京言きやうげん

右兼みぎかねの尉ゑう 法名ほふな栄えい棟とう

定言じやうげん

右兼みぎかねの三さん郎らう 法名ほふな栄えい鳳ほう

実まこと言こと

右みぎ束たばの射や 法はふ名な宗むね仲なつ

顯あき言こと

梅うめ磨ま守もり 法はふ名な宗むね賢けん

憲けん重しげ

尾お張はり守もり

義ぎ氏し一ひと法はふ又また後のち一ひと云い杖つゑ憲けん政せい
 房ふさ一ひと又また武ぶ田た晴はる儀ぎ一ひと房ふさ也なり
 法はふ名な新あらた終はつありしこと祥しやう純じゆんと号なづ也なり

儀ぎ真まこと

上かみ總すう介け

武ぶ田た信のぶ玄げん一ひと法はふ人ひと十じゆ八はち歳さいよりおと也なり
 軍ぐん切きりあり儀ぎ玄げんこれとい感かん一ひと儀ぎ真まこと
 といびひ引ひ率そつしことること後のち名な乃なり張はり也なり

子系かまきしゆし軍あり毎
先鋒より甲州没落の後刺髪して
織田城に依たつては信忠のいふ信忠意
しんまされてたりゆらし刺髪しとあれ
かこころなりとも也今より我々を
けんとあつとたり是れよりよりと
名づけく大南寺とふとあり
水原氏連り一属しと又先鋒とき
文祿元年名護屋陣いとも京都

しゆし

東照大権現より湯しゆしつり信州

しゆし花しと歳五十二

法名家

連之

孫市郎

信真子なりと接へし連之と書きて

しゆしと連之実ハ信真が才居るの尉

信秀が子なり信秀氏田信玄より
属す武州廣本よりとひく
るげらちりと振く志らる軍切
ありうらら水菜氏と属す下地
作野とび是利りとひく志らる
軍切あり
也之水菜氏より久氏並より諱の
字とすまふ

大正十八年秀右衛門康より全發此

此信玄の同く小田原乃城より
ありうらら信列よりおし

大権現より信玄と志らるやと有る
わら集人志より命とて也之と
めしうらら志らる志らる正十
九年十五歳めらるる

大権現より獨り志らる
文祿元年石名渡屋御陣し信玄
安長五年小山田陣より志らる

信秀の系譜

しるし

同年開ヶ原陣ひらがら陣じんに佐々ささ

同十九年元和げんわ名なの大坂おさか交まじ陣じん

陣じんに佐々ささに水旗みづはたあり

重昌しげちか

之集しゆしゆ 生國なまくに後河ごが

元和二年七月二十日十一歳よじ

名述院なせつゐん教しやくに湯ゆにまり

同九年十二月二十九日十八歳よじ

將軍家しやうぐんけに湯ゆにまり

寛永十七年大水みづ当あ組頭ぐみづかみとなる累かさね

代しろ乃の撰せんとび小鳥こどりにまりお侍おさむらい

高昌たかちか

孫まご守もり昂たか

寛永十七年十二月廿七日しちにち

小姓組こせうぐみのま当あとなる

家乃級
竹丸

● 盛次

小幡

とらぬは葛保殿より小幡守殿

葛保の日本生國を以刺殺し日澤

と号す

後列今川氏よりあつかうごとく
浪人となり富士の下方に法花あり

虎盛

后と後一 武田信縄のまゝに虎盛
男子四人 女子三人と記すに甲州
一赴くは元葛保とありしに
小島と稱ど 武勇に譽ありしに
足利大将とあり 信縄に虎盛二代つふ

孫十郎 織初 山城 生國 丹波
明應九年十歳少く父とたり

甲州一 武盛
大永元年 信玄誕生に元今川氏の
侍大将 福清と記す 後に武田氏共
と記すに 甲州一 發向と記すに
武田乃一族 家老とあり 退く私宅
入信虎 一子と記すに 武盛と記すに
敵首と記すに 合戦一 勝利と記すに
武盛と記すに 武憲が外祖父系 養徳と記すに
乃大将と記すに 武盛と記すに 武盛と記すに

伯父山形漢語寺と討丸養濃寺とび
虎盛も又ぬく疵とやうな所は切
りて二人たゞに虎より諱乃字
とひて養濃寺と虎形と稱し一
を虎盛と稱せり乃り佐玄乃命
りて乃りて福信と押入んり乃り
高坂源正とたり一佐列川中島津の
城二曲端りあり
永禄四年六月一病死と歳七十一

昌盛

源十郎 又若菜 豊後守 生田甲斐
佐玄小幡と總称し命とて幕とひ
乃字と昌盛と稱し一好つし一に家にと
く小昌とあり乃りて小幡と稱し
昌盛の乃りて又乃子二代たり一高坂
源正より承せり乃りて乃りて乃り
くおのりて乃りて乃りて乃り

足利并し同ん此足將として伯父孫
お後しく昌盛、任玄の罷下し
ゆり足將二十人馬乘三騎とあづる
永祿甲子川中鴻合戦乃討軍切り
しらく武田家此帯と好るさうか
り死二十八歳
同六年信玄罷下此武名奉り口人
乃救り列といんゆり口人古預病
越中守加藤丹後守と原昌書物小指

昌盛方り昌書物に授り刺殺し
昌盛信玄勝れり感状十七通と交
ふれど甲州乱のり死し
大坂一乱のり京憲
東照大権現乃幕下り
小寺一換田基古事つり
京憲が父昌盛り

天正十年三月六日
相良城より退く
手勢三百人あり
昌盛
平八一交と本多忠房と
と交はるる
子交は平八一交と
平八一交と本多忠房と
と交はるる
昌盛
手勢三百人あり
相良城より退く
のりあり

天正十年三月六日
病死し
昌盛
享年九

昌忠

友兵衛 又昌忠 生國因あり
天正十年七月十九歳
大権現より退く

同年

大権現甲州河内國あり
新府より退く
陣乃少き
氏直
昌忠
昌盛
昌忠
昌盛
昌忠
昌盛

くまの 文内とまもく 文内は奉と 名残よ
連心とむうふ 逆心とまよかむ時
保板金右衛門つじとまよかむと
家とひとひく 平京保板と沖前
やがたれ 御備りとまよかむと
平原羽屋と布と刀と括と奮撃
多員死人数と二十七八なりは時
昌忠とまよも 退りとまよと遂
平京と斬候と

大指規昌忠の年、まよ二十小も満じ
くろ乃勇切ある奉と感養と
て目日と中領の地とまよは時
昌忠ぬく 疔をわくふ 丸山系を
山中大琳 納命とつけてる 此剣城
療せんりくあり 昌忠が宅とまよ
且作橋甚其昂 沖使とまよと
同中一日り 交交なり
日十一年

大権現は東田七九郎とて信列
教向やむ付り歎六の岩尾前山元
小屋相本を存五ヶ所陣とらふ
味方の勝同有利とぬかど人十三
月の乃志と批裁はじは忠岩尾
りしとて下り首級とほり
又前山とてい味方當せん
とらふ名と回布とてい味方引
退んとては忠岩尾とてい

首級とほり乃外とて軍切
あり

同十二年尾列長久と合戦の
首二級とほり具しとては僕
も又首二級とらふ乃志

大権現は東田七九郎とて信列
教向やむ付り歎六の岩尾前山元
小屋相本を存五ヶ所陣とらふ
味方の勝同有利とぬかど人十三
月の乃志と批裁はじは忠岩尾
りしとて下り首級とほり
又前山とてい味方當せん
とらふ名と回布とてい味方引
退んとては忠岩尾とてい

こまふ

同十三年八月二日真田陣よりとて

味方利とてありあり昌忠の所

共士六人深谷村とてありありあり

よりと味方よりありありて退き

とてありあり

大體現中多作後与正信より命より

つとありあり昌忠お陣北交より

はとめ残よりありありあり

在直

戒けよりありありが討死せんよと恐る
今より後ら謀中に懸べりありあり
進しりり事たるも正信白須平次と
ありありとありありとありあり

交長元年六月十七日病死と歳三十六

今年三月より生るるありありの子

家督とありあり

源次郎 又右衛門 生國同家

天正十年甲子ふし礼れい此こゝにに十五歳いひ少しく
浪人なみのりととたりたり伴ばん勢せ國くによりより赴きこ織お田た信のぶ雄たけ
乃の家い臣しん去さ方かた道みち由よしがが養やしみみととたり

同十二年じふにねん峯たかね陣じん乃のよりより公こう方かた勅しやく若わか水みづが
うう才さい人ひとよりよりありありとと軍ぐん四しとと扇せん一いつ矢や庇ひ
ととりりふふふふ

同十四年

大だい掾げん現げんのの嚴げん令れいよりよりよりよりとと井い伴ばん常じょう少し將しょう
がが同どう心しん廣くわう濃のう森しん濃のう守しゅがが養やしみみととたりたりとと

同十八年じゅうはちねん小田原おだわら御陣ごじんののよりより藤曲ふじまがら痛いたく

よりよりとと協けう五ご左さ衛ゑつつ越こ甚しん心しん棟とう原はら次じ右みぎ衛ゑ等ら
ととたりたり軍ぐん四しとといいげげよりより矢や庇ひ妻つま
西せいととりりふふふふはは年としよりよりありありとと浪なみのり
人ひとととたりたりふふふふはは十じゅう一いち年ねん

交かう長ちやう五ごのの関せきヶが原はら御陣ごじんののよりより若水わかみづがが將しょう
がが後ごりり由よし系けい一いつ本ほん保たか氏うぢがが陣じん中ちゆうりり
よりよりとと馬うまとと馳ち進しんととりり諸人しよじんよりよりよりより

つらと首級と坊らり

同十九年大坂御陣の翌十二月

堀場より足利中よりいへく大

志と吐付し敵共鉄炮を多くと

在連が股とらん

翌年大坂御陣乃節五月六日水

勘首末とたり使節となりと

大和口よりいへくいれよりて

幾あり及むと翌日の戦場

ありと首級と坊らり

寛永五年作和山よりいへく病死

系憲

練七郎 勘首末 生國同安

天正十年十二月十一歳

大権現よりいへく

文禄四年二十歳ありと幕下

よりお奔と云りやいへとも

名徳院殿とていふことすつるゆへに

これなるのりていふと脇立た束の花井

清心と頼みと井伴と初め物並改り

摺紙とのりていふと秀名徳を其のり

ささりて合裁ありていふとささりて

並改りていふと

名徳院殿とていふと名節とていふと

つていふと

交長三年秀名徳を其のりていふと七月八日

あ月十六日此書伏見諸勤とていふと

京憲

名徳院殿の御殿とていふと

此村を其のりていふと

りていふと

日八年京勝謀叛なりていふと

大徳院を小徳院とていふと

名徳院殿とていふと

氏家なりていふと

ふのこく井伴重政の陣中しあり
すそひしと石田三成叛逆とあれ
ししししし

大獲現る方しししし
井伴重政先もなりし法軍と鑑
重憲を重政よりとりて授けし方し
おししし重政の城没落の事重政
追ふししし
圓ヶ原合戦に死す重政二ふりき
し

ふつと宇都田八子の事と重政の事
重政の家臣本僕土佐新平重政小丸山
ししし本僕が陣中し重政大將脇
五右衛門と中村と重政并し先を重
重憲の事重人は重政にありし馬と進
うれ中しし重憲を十なりし見し
進赤が重政に重乃中しし重憲獨
具是と重政の事しし重政に
しし重政の事しし重政の事しし

ありとく 京憲が許へ 女使とつら
く、いとも 汝もや 小引退へ
京憲 養へ、いとも 我今 活人 汝も
一と 幸り 先陣 一と
自能 此 若士 逆 疾 人 心 一
つらと、いとも ぬれす 子 甲州
乃 家 風 あり 我 ひとり 剛 たり
あゝと、いとも 一と 一と 一と 脇 五 右 衛 門
下 知 一と、いとも 教 ぬ 一と、いとも 若 士 人

電 一と、いとも 氣 一と、いとも 味 方 一と、いとも
一と、いとも 揚 一と、いとも 家 一と、いとも
よ 一と、いとも 蘇 波 一と、いとも 馬 一と、いとも 教 一と、いとも
一と、いとも 教 乃 若 士 鉄 炮 一と、いとも
一と、いとも 京 憲 一と、いとも 馬 一と、いとも 丸 山
一と、いとも 教 一と、いとも 若 士 人 一と、いとも 脇 五 右 衛 門
一と、いとも 中 村 一と、いとも 若 士 小 幡 一と、いとも
三人 在 此 方 一と、いとも 一と、いとも 一と、いとも 一と、いとも

先鋒さうの首と坊よりとせし
く京憲くわめ少ふ所乃首とせし
後者よりも花馬より京儲池と右
りたし疾池り幸五所より
あしと又首級と坊より後者より
首と坊より堪どあれりよりと甚
梟とよりと又とじ幸五所より
あしと追留川より一人と斬
同十六年秀於二条城よりおとし

大権現より對面あり京憲のり大坂
合戦ありへし幸とあふとあれし
て酒井三右衛門とこのにて長具馬具
差物等と松平隠岐守定勝とあはけ
遊京憲より幕下りゆりとのり
定勝は幸と坊より
大権現の上より遊し

同十九年大坂陣の内京憲は田代が
守り家臣富田越後守陣中に寓居し

しつふかりしとびいて、事急ぢふ
處しとぞりして他の家も此若
十人外より来りて伴直が陣中
しつゝしと、鎧の鞘とらうて騒動
し、同士軍ししよんんとし、付り
京憲とあがりた、水人むる方とき、
新堀の梅の水濘乃と、梅けさ
あこきはとつてありと、伴直り若
あ、水もりしれと結

辰巳刻し、九馬がしとせりん、
付り敵共矢念れ下り、柵とり人
あ、し、味方堀乃中へ進入とらり
敵鉄炮とらんと、おれと打京憲、
柵とりしと、連と、五家、村と、庄次郎
鉄炮し、あつらうの、おれと、海り
堀乃中りあり、松山八、おれと、た
けと、退く京憲と、し、おれと、海り
未乃刻し、京憲と、し、おれと、海り

が後長中條又若菜父子川西甚若菜田村
助左衛門つなざゑもんなむ安房守あんのりもりとふび安やすひり乃
共とも葛かつらぎ左衛門ざゑもん若わとあひあひもりと一ひとあり
あり京憲きやうけんががいいくく徳人とくじんありあり居ゐる
ししらら鉄炮てつぱうありあり居ゐるるととひひろろん
若わすすみみややにに引退いんたい居ゐるるといいふふ家いへり
いいくく京憲きやうけん一人ひとりあありりとと小堤こつて此
ひひりり居ゐるるととひひろろんん味方ちかひ乃
とつとつ子こ市しのの鎧よろい三さんががありあり京憲きやうけんああれ

ととりりとと鎧よろいととももいいくく京憲きやうけんととりりととりり
ととああいいぬぬももりり進しんとと後ごみみととりり
一ひととと若士わかし六む人にんににあありりとと京憲きやうけん一ひと
ひひりりとと油あぶらのの氏うぢ四よ人にんととりりとと是これと
あありり日ひもも漸しぜんくくれれんんとといいふふとといいふふ
引退いんたい居ゐるるといいふふ京憲きやうけん若わとといいふふ
これこれははまま浪人なみのり乃なり若わとといいふふとといいふふとといいふふ
先陣せんじんありありとと軍四ぐんよとといいふふとといいふふ
すすとと子こ市しをを居ゐるるとといいふふとといいふふ

かゝるにさしあがりたれまゝに
と六人の共士又右のしほをうつと
老伴直りしふと死にけり京憲
伴直りしむとくま田父安房守
元来親しく同僚として武田家後継
中よりあつたむとされふ家もあたり
其田はひより父乃教と字すとつふ
奉あふ屋うすけ小勢とんたふ
らびおと殺ふべしとて味方と

つとて城中にせま入べしふ不華
あつと教のふあゝあつたん天敵
かり退へしとぞとれぬも共士母とふ
れとむとめと退りしむれしむり
と先士卒として引退しむ伴直
とび京憲泳次右衛門三人のふい
とかりと退くゆ十百計討し
伴直鉄砲のふあゝうらたをゆれ
京憲これとたときけとゆとれ

此も至剣もまもる痛ゆへ一所の
百少くやとむゆあ度京憲教
若一ひひくく換あまが銃砲大
将方伴豆痕とやうふと川邊くゆ
音勇あふとまりとあれをせむへ
しとひひく銃とりら伴豆とた
づえくゆりうれ家屋と——
あれと技しむもぞあ——京憲
若物とうたふ伴豆が、い——こきし

後中休息せしと死すくち若物た
しに力せり京憲ゆりくと若来
め教しむひく我く物と——
なたり平生れ若とけがえんゆと
恐は弛ゆりくと来ゆりつと子と
より伴豆と甲く紐頭着田越はる
がしに赴終るれ合戦の始末とゆ
ふけ日京憲矢とるんと左の膝と肘
られ銃砲とゆりくと右乃股と——

とれらら又定勝勝重一ツギ
乃ら二十日一々大坂へ赴くは
主馬京憲一あんとつみ京憲
今日内日ある日たり廿六日
あなととつみ

日廿二日又日京憲大坂一とい
今日事とうといかふうの一々
念たり二は新たり三は
浪人等入北はたりはは大坂の煙

なり翌日京憲大坂主馬が宅へゆ
うに一布施氏新文氏器於大寺
若川控在葉つ長友丹波信長聖院本相
あひまりて報送のつと謀ふ

日二十七日秀秋の旗大将大野俊理と
いふ田原友成長友我前毒草
後通の藤助本村長門藏田原つ若
とうつみ

日二十八日大坂より伏見へゆり秀秋

しりあさり天正十六年判此黄金并
り大姫うもるがしとふこころ乃書札
書と指糸——と京憲として秀頼
り湯刃せりえんとしといへども
辞——て恋せざるのう——と具り
隠波守定勝——と二十九日
定勝はおの赴とつて伴登与勝重に
若勝重がつくまに十二月秀頼控判
乃才一件と信原人を扶助しつるは

しりあさりといへりあさり——今京憲とわ
るん少くは是控判と違背——
謀叛と金分此場なり天正十六年此
判令も大坂より外へはあれを
實の秀頼の令なり——是京憲が
偽りあり——と秀頼と湯せざる
をいふ
あはり——とあはり友なりとつく
け紐とつる——後府と若くは内

けりべしとありとこへぞり京憲
幕下とお奔りてよりこのことぞ

二十一年よりいふ今頃のぞ

路いふそまつるといふと質なく

てはかまへりといふと日向半葉横田志有

二人乃内とまつると質とせむとるべ

日向横田をせもり京憲が親族なり

家よりいふと京憲老母并兄孫の助

と外姉一人姉女一人甥一人とて

又人ともつと質とて家りて

うとありて是と平浮り磔り

せり家へといふ勝重とれり

使名とけりといふと題と後府

云らとて家りといふと

大権規秀頼の叛逆と急務の且具

中石まゐりて板倉門脈正と品

とて休見りて赴りてし書校

重昌休見より後府りてゆり

不志れども後府の佐士もあつて
今定勝衛重が大阪を過つて

いふなりとあつて今油のふりて
大権現のれと佐と給ふ激し太勤乃

アト子へ一室しといひて定勝
衛重もまゝあつて

同三月七日に多之野分正純 約命と
いひて書札といひて定勝につけて

いひて京憲として又大阪に
いひて梅子といひていひて

うの右ちといひて
大権現御が馬もまゝ

といひて同十乃京憲伏見より大阪
いひていひて時一室勝が

いひていひて海井三右衛門勝重が
金子八郎云来祇京といひて使と

いひて京憲といひていひて金銀は用あ

しとふあ

大捨状乃由給もとてなける給ひぬ

うのるり一不慮乃由あり

しとくち

名進院教済一人の勲芳たぐへん

謀りしりて敵共其發向を月内と

延引りしりてむらりめり

たり京憲答くしりて才一候り

しりて味産とかく番と通給ふ

魚一才二一宇治川此と石山此を撮

るちとれる給としりてあらしりて

一是敵共其勝而大津り發向しり

而此道たり才三一勢多の指れ通しり

大和より進來るるありしりて

是又尋來給ふしりて才四一其家大

坂へ赴き候家よりしりて

拘とこしりて大坂此士卒と敵ら初と

しりてしりて發向延引りしりて

ちか子へーり 敬共進教にお定と
いれりしとひく 戒小方より人と
まつくまやくせと人として大坂へ
来りしにびへこの旨と云々奉り八節を兼
許しとく若へー教向延引せむと云々
月まきくハ浪人拘まふと云々
へーと云々を海井金子は奉と云々
定勝衛重り 若屋へ戒はひく
ひけりし家もら若乃よりと云々

書札と云々と云々へーと云々只口
つゝ酒祝と云々使節乃と云々
いここの疎と云々知へーと云々才丸
大和り一葉解人乃一揆あり是程
米賣賣乃氏のと云々と云々家と云々
且江川水郡り一揆も人ありと云々
秀頼ハ母乃國ならふと云々と云々大坂へ
と云々と云々と云々しあり才丸
西御市巾と云々あるに云々と云々

井此やうりく番とをうふべしと云々
二月廿二日大坂の評議しとく砒霜
石とらうりく井乃中へ入べしとあり
又いふく江戸より大坂と通じ侍大
将ありありとありとありとありと
又いふく吾人此實と云べしとあり
と、いふく日比谷ふふ市の相番を見
るに、いふく奉たられ京憲が進退し
らうりく教共のふふとありとありと

お馬お見といふく射陣れとあり
いふく油味外よりあると云々此
一極なりとありとありとありとあり
いふく此定勝勝重ありとありとあり
と、いふく二三日と隔くとありとあり
路筋やとありとありとありとあり
いふく三方から矢此風とありとあり
お馬とありとありとありとありとあり
いふく獨わけけけとありとありとあり

園東ら夫此風を都中へてこし
云れども京都伏見騷動せり

大権現御出馬ありし
出也京都伏見を發し
すとなり

同日大坂へ赴く平野町へ宿

うの衆大勢に馬と兼舎とを
りりていし
傳此糧米三十石と給ふべとなり

より長次郎と
百人とやいなふべし
しと京憲に馬が宅
けり此を
けり長次郎と
が履とぬし

十三日
丹波羽雲院等と同ト
舎と新ま

十三日
丹波羽雲院等と同ト
舎と新ま

を發しとべ

大権現冥東とて比奥州の法軍とて

すくるとは馬もべとて衣儀

もとて守京憲がとて家考

りたをけくえんゆと祿がらん

のこふ守男ふふとつべとて

案しとて今度

大権現軍共とてなとてとみや

り中進發あつべとての友と

大権現天下とてつらとて

十六年名実世とてあつとて

今度大軍とてよりとて

うの名願けとてんうとて

月秀とて勝うの六月解

大権現井伴並政とて只二

涉川氏とて七年とて

ゆとてとてとてとて

は等々越えしうふし今夜のあつど大
軍を引率しぬんさうんゆと
志べし新まがし奥川の若旅装
り十日又十日後とく江戸
より江戸といふと若とく若
り十日乃いふゆと所あやし是より
十日後と強く京都と志べし志
七日敷とてり十日なりうる
りもやく京都と進發し勢多

橋と橋落しは法固而し合戦とあり
く勝敗速く決まるとと

大権現春秋とてつけとせしゆいぬ
あつと一覽遊しゆふゆあは
天下を秀れれふふ人筆装とて
りす京憲がしと今夜

名徳院殿と法と法ありしとと
友堂とてとていふとつと
うの友と五翁乃若の中とて

くまの百人あつは味方あつて
軍しは

大権現様よくあつてあつたなりあれ
とあつて楽じりり只中務代の子
士のともあつていふてまつるべし新
くまの中務代の子士あつて数一
りともあつていふてまつるべし
と秋末田友堂もあつていふて
まつるべし

くまの中務代の子の國三河遠江
後河甲斐信濃作後越後越前近江
尾張美濃實叡八州とていふてまつる
二十ヶ國なりあつて安房作竹乃内り
あつてあつて大小といふてまつる
一ヶ國よりハ子れ共士とあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつて
百餘ヶ軍將官十餘ヶとあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつて

ありけし心五萬とるく

名徳院教り付属一冥東北、海め

水

大権現五萬といふ御く三方り進

發一給ふべし一い勢多の指

と徳とつとも江列水部れ通り

坂なり發向やぐ味方、つ道乃而

陣と張へきんやけ路を元龜え

大権現保長と救い越あのおま

酒来し多み地たれ

大権現乃くあつめと而たり新ま

志賀唐海一といく射陣

あり堤と築てあせぐん大津

町中の米穀をみり味方乃若稻を

ふべし京憲が、

大権現ありいを敵山れりるり

来り給いありいは山中越り

京那り入給うあ田友堂も定て

紀糸きいとべー新あらたまがいまく山やまののや
むろののろろよりより撃うつつ一い京きやう憲けんがい
くく是これ油あぶらのの深ふかくく武ぶ道だうくく連れんせせらら
也やへへちちりり坂さか本ほん地ち形かた狭せま一い
大おほ権けん現げん五ご美み乃の若わ士し悉しつくく家けのの陣ぢんととら
庭にわののどどああららいい山やまままりり居ゐ或あるは
ハハままりり居ゐるる此こゝ亦また可ましし此こゝ家けのの陣ぢん
とと張はるるああららんん結むす軍ぐんここららののままくく山やまをを
ののややべべののどどりり一い教きやう退たいんんととすす家

内うちれれととあありりんんととせせむむいいつつららりりてて若わ
庭にわへへ入いぬぬ若わ士しとと挑たかかか一いくく投なげげ候こう一い突つ
出でてて横よこ合あひひりり撃うつつ一い味あじ方かたををららが
とと道みちななれれどど息いきとと續つきき本ほん堪たむむくく一いか
べべ一いととああららをを教きやう若わ士しののままりり見みと
ううくくののややいいままふふらら鉄てつ炮ぱうとと放はなすす
一い味あじ方かたににりりああららるる一い只ただ
大おほ権けん現げんとと我われららんん幸さいとと福ふくををららとと城しろり
義ぎととののややいいままふふららくく一いととままららたたん

と定むべし——去年蘇城の内市の難人
系尚存の飢としくらんぐる城の中
入るのたかりうれ中武道と益ある者
と名づけし鉄砲とてしじりて
く蘇城の内婦人小子とてしじり
り鉄砲とてしじりて城外れを
うきどしりてしじりて城外れを
乃若るうのりらふゆりて
鉄砲りあふ事矢とてしじりて

とてはあり蘇城とて教とてせ
ぐあはるるといふうらまの道
と勝利とてとてしじりて
大守とてしじりて系助とてしじりて
とねべき評議とてしじりて休見とてしじりて
つせん主馬とてしじりて休見とてしじりて
とてしじりてけしじりてあり秀頼の
御墨下とてしじりてしじりて
ゆかふらやとてしじりて是とてしじりて

才達^{えと}一^としひく^とあれと^ら討^らありい^は
伏^く若^こと^け後^まく^けあ^まと^らう^らう^ら味^あ方^はを^ら
ら^らく^ら息^いと^ら後^あの^ちも^もま^まず^ずう^うの^のを^を
味^あ方^は少^すく^く常^{じょう}古^こと^と孫^{そん}や^やう^うと^と名^なと^とカ^カウ^ウ
一^いう^うの^のを^をい^いく^く今^{いま}多^た五^ご十^{じゅう}五^ご歳^{さい}
たり^り永^{えい}祿^{りく}三^{さん}子^し儀^ぎ長^{ちやう}と^と義^ぎ元^{げん}合^{がっ}我^がの^の討^と
常^{じょう}名^なあり^りた^たど^どう^う乃^の歳^{さい}と^と考^{かん}て^て
吾^{われ}人^{ひと}と^とみ^みま^まは^はら^らぐ^ぐに^に二^に歳^{さい}の^のた^たり^りに^に
ぞ^ぞ二^に歳^{さい}あ^あく^く長^{ちやう}切^{きやう}を^をう^うと^と坊^{ぼく}ん^んや^や

皆^{みな}是^{これ}も^も一^{いっ}つ^つり^りと^と名^なと^とじ^じさ^さかり^り祿^{りく}と^とを^を
と^とじ^じふ^ふの^のを^をい^いく^く義^ぎを^をり^りの^のこ^こと^とき^き
の^のを^をの^のと^と改^かめ^め除^{じゆ}く^く後^あの^のう^うた^た人^{ひと}と^と定^{さだ}
め^め京^{きやう}都^とり^り發^{はつ}向^{きやう}せ^せど^どう^うと^と京^{きやう}憲^{けん}か
い^いふ^ふ家^けり^りと^とい^いく^く長^{ちやう}友^{ゆう}丹^{たん}波^はら^ら鉄^{てつ}炮^{ぱう}の^の
と^と數^{すう}百^{ひやく}人^{にん}と^と殺^{ころ}し^して^てあ^あく^く京^{きやう}憲^{けん}か
い^いら^らく^く是^こを^を抑^{おさ}せ^せる^るな^なく^くて^ても^も京^{きやう}都^とへ^へ
發^{はつ}向^{きやう}た^たり^りと^とい^いく^くあ^あれ^れお^おし^しり^りと^と人^{ひと}城^{じやう}
伏^く見^みへ^へた^たり^りと^とい^いく^くて^ては^はう^うと^と海^{かい}井^{せい}三^{さん}右^うの^の

若家よりいへ松平定勝板倉
勝重ホしれくら後府しととと
百

大塚現法が馬あり是よりここの大野
う馬京憲より百五十勝の頭と見
とせうれ田五十勝を松山八義と
く長水一五十勝の村と庄を昂成
ろく長水八と英令三子投と
おれ一投とくは英令とろく鉄

砲のまの三百人を拘りて
いへり此れ付くは用に
なり三子投とくは英令三子投と
定勝勝重と契約ありとこれと
辞していへ鉄砲はまの百人勝
れ共を村と庄を昂成八義と京憲
とくえとくは英令三子投と
いへり此れ付くは用に
なり三子投とくは英令三子投と
定勝勝重と契約ありとこれと
辞していへ鉄砲はまの百人勝
れ共を村と庄を昂成八義と京憲
とくえとくは英令三子投と
いへり此れ付くは用に
なり三子投とくは英令三子投と
定勝勝重と契約ありとこれと
辞していへ鉄砲はまの百人勝
れ共を村と庄を昂成八義と京憲
とくえとくは英令三子投と

教の多しとていあついで味方此處
實とみまへてとてい誘ふとたかく
いさひが布とていあついで

日月十方午に刻し妙心寺の長老及
びろの才子作秀之妻通し書とあり
く告くといふ月日下し禪宗と
名と書するはとてい長老此書をな

長老は才禪宗と名と傳はり
然りともおもふと勤宗とてい禪宗人

東方し水日付にけいりやくとて
とていえへ集るる水の中流のりあく

二月廿四日とて地へ下りて大いなる海
とて地へ橋子流波後伴賀後とて悉

中へ中へ江列へ下りてて伏見
中城へ下りて中へ移るのたくとて使

我とありて知るる若とてせしるる水
とて中へ入りて中へ移る

三月十七日

禪宗

大正馬橋

妙心寺

徳小島脚ノ下へかかると勸業橋と
 穿入東分ノ中目付けはやく
 ころそく新万山の中先くろあ二月
 廿四日と化へ下別廿日と化へ
 分判金十枚なりとありこ仕とえ
 ノ様子悉く隠波友伴賀友ノと
 弟ハ中江別へ下と下と伏見
 中城に在る中へ移りたると仕又

二三ノ中ニ土地一帯下中梨別ニ新着の
 名もせしむるあり中油取とありそ
 度てより中油為り地大切なる系
 下へと解後と

此ノ地ハ勸業橋ノ心口ゆり
 固在東橋ノ中ノ之馬橋ノ後彼
 所ニ在りてあり中油取とありそ
 度てより中油為り地大切なる系
 下へと解後と

固在東橋ノ中ノ之馬橋ノ後彼
 所ニ在りてあり中油取とありそ
 度てより中油為り地大切なる系
 下へと解後と

三月十日

あきつ

坊園茶屋様宛

山形へお茶のり

園

去る十日京憲として大坂へ来た
 志れども長老作意をされども
 接へり共書の内容
 十日未乃刻京憲の振宿れ通人
 此是若も子もいふとせり
 と持て往來するものあり
 長刀

橋本洋茶屋が所よりとらり
 来りども京憲が謀略して
 京憲小教成
 くらりともめ新し
 と愛せども書り
 後と決り
 今日と飲食来り
 くらりとも高月
 お酒へ

中とちこれとつ
下り橋本保左衛門京憲が許し来り
京憲又小教とちと橋本が
と旅宿は道とこれあつり
つちりといふ橋本ゆり大野の
友丹波憲政大学へ
更し心と氣
竹田榮森もといふ妙心寺より
石乃書うれ理ふゆなと京憲伏見

りといふ松平定勝板会勝重と密謀
とちこれとつ

大権現

名瀬院教りといふ
道にこれ来ありといふ大坂に
明り百勝集れ
長といふ并し英令三子
とちこれとつ
心といふ

僕只一人とありて、
方より、
は比京於伏見乃、
なりとく、
ろ乃あぬれ書と、
京憲多と、
とのく、
こ、
は比京於伏見乃、
なりとく、
ろ乃あぬれ書と、
京憲多と、
とのく、
こ、

大権規四父子、
く、
ありとく、
京憲、
ゆが二ん、
京憲も又、
り、
秀、
北、

く、
ありとく、
京憲、
ゆが二ん、
京憲も又、
り、
秀、
北、

あつちりへ一室としいへ京憲堂
初と事く之馬一校たびいへ海益を
とりんしと十九りへ京憲堂なるが命に
よりへ和泉の場へ赴く之馬日付あ
人ししてこれと監せしこれより先
之馬長友丹波へ命して京憲堂なる
新宅と稱し二十五日へ京憲堂なる
り許りしと回へしとく新宅しとて
りお來りりや否やとるがしく二十

ちりへ成程しへ二十日あはつり
飛子べしとてしへ之馬がしり
京憲堂とつとつとつとつとつと
日付とつとつと
二十日ありへ京憲堂場へゆり無と無して
二十七日に曉より船とがし己の別
り尾流りしげけ敷と彦本と泊
里二十日ありへ伏見しつとつとつと
大坂のゆとつとつと又京良しとつと

付し ね平定勝方より海井三在軍と
あつて京憲より若くはともく大坂よ
し人とはけりして油とてんとす
あれりしりて京憲江別坂なり
後居し

二月十日

大塚二系城より美沖あり羽吾定勝
勝重 約命とけりて京憲とめと甘
し 難父とてく妙なる長老と也

し長老乃、いよく我え来が家たり友し
勢城せど、もと家才あり、作勢を子
とのた、織田を承の子し、くわ妙なる
乃傍たりて、ぼり、是係し家あり
あり勝重を、いよくあれり、向のをも
吾く、いよく去年勢城乃、けは作勢
自らり、いよく今改て、固勢を、いよく
と、愛り、いよく勝重京憲が、いよく
里方と、事と、感弟と

大坂落城乃後のち又月げつ下げ旬じゆん祿ろく尔に病びやう死しと京きやう
憲けん勝しやう重じゆう一いつひひくくいいくく長ちやう老らうおおろろ
いい一いつ作さく翁うんままがが命いのちととたたままととくくべべ一いつ信しん吉きち
希き唐たうととくくててくく乃の陣ぢんくくししいいくく
函わん瘡そうととくくいいくく病びやう死しとと信しん吉きち快かい川せんとと
くく一いつ月げつとと輝きととくく光くわう秀しゆうがが為なるる
害がいややくく一いつ好こう子し希き唐たう快かい川せんをを覚おぼゆゆ
妙めうらら乃の長ちやう老らうおおろろ今いま又また長ちやう老らうとと教きやうととんん
乞き西せい例れいおおろろ勝しやう重じゆう京きやう憲けんがが事こと様さまりり

遊ゆうししくくとと感かんととししかからら祿ろく尔に死しくくらら
みみととままくく名な種しゆりり遊ゆうししととらられれよよ
ししりりくく長ちやう老らう作さく翁うんままがが命いのちとと今いまとと今いまととんん
幸さいとと坊ぼうくくりり

京憲小傳

長ちやう母ぼ子し正せい月げつ泉せん州しゆう坊ぼうりりとといいくく
大だい久きう保ぼ石せき見み吉きちがが奴ぬ僕ぼく二に階かいくく死し翁うんままがが命いのちとと
播はくくをを付つくくととままくく人ひととといいくく京きやう憲けん
ああれれとと教きやうとと

同年二月任名^{しやう}り^しと^いく福清掃部^{ふくせい}が
僕^{わが}後^ご屋^や心^{こころ}り^り勢^{せい}居^いく^くせ^せ屋^や入^いと^と
ゆ^ゆり^りく^く之^{これ}務^むえん^{えん}と^と京^{きやう}憲^{けん}ま^まて^てあ^あれ
を^を討^うと^とか

同年五月

大^{おほ}権^{けん}規^ぎ大^{おほ}坂^{さか}乃^の津^つ敏^みと^とい^いく^くの^の美^み源^{げん}十^{じゆ}郎^{らう}
奴^{わが}僕^{わが}二^に階^{かい}り^りに^にこ^こり^りと^と堀^{ほり}指^{さし}と^とあ^あき
人^{ひと}と^とき^きさん^{さん}と^と京^{きやう}憲^{けん}ひ^ひと^とう^う乃^のう^うか
屋^やさ^さと^と指^{さし}と^と是^{これ}と^とう^うと^とう^うか

同年^ご政^{せい}年^{ねん}落^{らく}城^{じやう}乃^のと^と京^{きやう}憲^{けん}并^{びやう}伴^{ばん}並^{びやう}政^{せい}
が^が家^けに^に本^{ほん}僕^{わが}氏^しが^が陣^{じん}中^{ちゆう}に^に寓^ぐ居^いと^と討^うと^と
政^{せい}年^{ねん}と^とい^いく^く落^{らく}人^{ひと}十^{じゆ}五^ご人^{にん}あり^り京^{きやう}憲^{けん}
馬^{うま}より^り下^げ曹^{そう}と^と脱^{だつ}と^と難^{がた}者^{もの}三^{さん}人^{にん}と^と切^{きり}見^み
孫^{まご}乃^の師^しも^も又^{また}二^に人^{にん}と^とき^きる^るか^か又^{また}江^え戸^こと^とい^い
て^て竹^{たけ}尾^お氏^しが^が奴^{わが}僕^{わが}人^{にん}と^とな^なり^りて^て小^こ川^{がわ}越^こ屋^や
が^が門^{かど}と^とゆ^ゆり^りか^か名^なの^の家^けに^に勢^{せい}居^いと^と京^{きやう}憲^{けん}
と^とい^いく^く竹^{たけ}尾^お氏^しと^とい^いく^くあ^あき^きと^と
う^うか^かと^とい^いく

日十年依見の江戸町といく石墨
庄三郎の奴僕法とくしき家と藝と
てくこありあり京憲これと討ぬ
日十三年五月十日江戸市智川
といく河持の内閣降乃りあり討ぬ
京憲の人心といく疵とめりといじ
京憲尾州清次りありといく村氏
廣同りといく叛逆はまといくこ
まといく

又江戸作和山ありといく廣瀬氏
といく叛逆の名といく人是を
斬
京憲裁場といく疵とくといふ
始終といく六ヶ町あり
元和元年四月十九日
大隈京憲と勝重が宅といく味方
り大坂と海といくありといく
谷といく右田藏正重勝の家僕といく

とつゝ名大坂へ通じらるゝとて
う乃亦もけふぬりてふらるゝ
もあつとてと

日二十日書札あ通と然とて
主馬が京憲へ授らるゝ
其略

其後内村と庄次郎
平山と平山
鏡也

二月廿日

大野主馬

尾畑勅書

大野現し書と御杖見ありての

尾畑乃字を是少はあらど大井主馬が

し業よりして正字と

物しし書と

將軍し書と

と謝し書と

勝重書と

庄乃昂とらふ松山まつやま八益やちやく吉年きちねん十二月じふにがつ甲子かろし大坂おさか
軍切ぐんきりある故ゆゑと馬うまとれ
と騎馬きま此長こちちやうとせんとせんと守とまも

大権現乃おほいけんげん乃の木き也やいいくく京憲きやうけん久くく
寮人りやうじんととなりなりくく於おここ僕わが道みちとと技助ぎすけと
ううちちささくく乃の去さるるふふ屋や勝重かつしげ又また
的命てきめいととけけ給たまりりくく京憲きやうけんとと守まもりり
名池なゐち院いん教けう大坂おさかりり津つをを教けうああるる教けうおおて
頼たのみみべべーーやや茶ちやとといいくく大坂おさか城じやうとといいて

りり惣堀そうごけとと埋うめるるにに柵さくととかかままへへてて大坂おさか
此これれははくくせせりりふふ志しとといいくくおおててふふ
幸さい多たとといいくく又また甲かとといいくく勝かつ敗ぱいをを
為なすす者ものとといいくく味あじ方かた必かならず勝かつ利りとといいくく
一いつつ乃の地ちへへ教けう共どもとと惣そうとといいてて長ながゆゆと
ああららししめめるる此これれをを惣そう以もつてて下した知しりりとといいくく
すす其その剛ごうのの名なとと孫まごとといいくくああららししめめるるとといいくく
らら又またいいくく教けう共どもとといいくく乃の疾はや池いけとといいくく
合あははししめめるる一いつつ更さらりり息いきののううららししめめるる

どと物見のふとゆけ伏さど
ゆももあつと足ふりくか
し味平乃勝利と以て奉るど
か〜とふ

二十万勝重 納命とけく京憲
し〜い〜味平乃人ともさ
あ〜〜人答〜〜者日儀
玄乃うお人とゆ〜士卒子人
あつはとふ〜是と〜先

坂の陣とと〜我場〜のど
はは隊長初馬と〜先駆〜
地利と察〜虚実と〜いゆり
是と大将〜若〜幼也と〜ど
〜乃とお人と定や〜士卒ら
〜物〜法〜組次乃下知と
〜右敵と〜進退と〜幣と
屈伸と〜家〜乃〜は勝利
と〜と〜只今

幕下りて敵と申しし隙りと
しめしう乃地法右れとくならん
利かあど勝利とほべしと進た
大坂城中に於て事と初るに田氏
三宿氏 堀氏 榎氏 米田氏 五人あり
五人といふ敵共れありしのみ
せめしれども我軍よりとて一勝重
いし
大塚現も我軍に事と回しぬら
いし

えが
ゆめ
いし
京憲
さ
いし

大塚現いしと落日し及らるに大坂
しと若湯ありてと兵士とて
お儀と持しゆ是と積り堤乃と
しし竹本とありし柵をかまへ
乃刻より卯の刻ししり鉄炮と
ししと敵は敵あへくかへしと
東なりしとありし終りかへしと

三九 於うたんと立ふ事あての
しべー 志うとすみらら十日
教乃 ぬきす取水と會うの地
教乃 若種とくたし 且候理と馬
先才 此中愈し士卒も又しり
ゆり 愈うとと又小若結とてやく
来し じふちちこれ以後小若
結と来し じべー 小若結り 窮
是は 味方是りよりと窮らふ

あらん 志うはとらら 教若 撰り
衆し べー 是甲 列志 若乃 考し け
こゝろ かなり

正月二十日

大権現 沙か馬あり 京憲 勝重し つけ
いゝ 軍將乃 印うに 大坂へ 通じ
志と 倍奉せし 事 ちれ
同日 京憲 板倉ら 集つと ち勝重
侍 大將と 二条

城より為りしものしりし一勝重計
ゆきと名姓しりしと

大控現想のつとまへく京初として
尾州義忠の旗下甲斐庄三平令井
伴多束火付二人とて入る成濃集人正
星と集人正とれらるる
是とて家りしといふ

大控現勝重とありし勝重を今日の忠

りしとありし 伊前ありしとありし

大控現もいふ水井右をとりし勝重は

せありし一昨日のあひだの理あり
大さ未督様下りしといふ火付二人と

とらぬしり今日より後松とれと紀ゆえ
う乃類とていふゆとてのゆふ途

百十三人ともありし

大控現もあつり勝重があはれと威美
一勝重がこれ小幡勘系

つとむと申かりとてな可くしといふ
右田織部が家人宗喜等共火付三百余
と披つくり家よりひく松平隠岐守
勝とて二茶城とすもろろしこ
河内守定切はるく伏見城と守らむ
又月一日勝重 約命とつけ給り
申すはるくはるく大坂乃若粮
しるく事とすや京憲答へ
いふ倉庫とせむもありあるいふ

又とぞいけふもはり是よりしり
これとて是より勝重しれらるる越
えとす

大権現威美しむいし 仰しはるく春
よりこの京憲後府よりえとす

こころ一としてよろしくすといふ
かゝりしであて 約命小より是様
大目日向氏清田氏とたし伏見大
坂といふ

名徳院教は先驅とあり難者九人の首
と斬とる乃鼻とる

大権現二系城より沙凱基乃三系京憲大
竹江尾つとる軍切とる

大権現に訪たるゆににせありと武道と
つとるさるありゆが軍切と若と

つとる武道とつとるさるありと
つとる是系憲たり

大坂陣はら板倉伴實吉は多る

安友市乃成濃集人正系憲と若てい
ゆ大坂の軍切わけくはる

陣は内大坂の若ゆが武書と若てい
とつとるさるあり

て教若して系初伏見より進發
せさるしは系初伏見と焼きた天下

若せは根墮たるとし又勢五松と
焼きたる若若と合戦して年と若

大権現の御武書たるといとい

とりてきたる京憲 巾着りか
名連院敷の作し大坂ありあつり
く二十方ありと外大坂れりとい
せ給ふり敷多京憲右としり
おしく照く蒼へしりつる院 作り
大権現とてしゆがと称したまふ
つふふとあも遠りなり 永井信法
あつりありとてとさしあ

昌重

坂十郎 生國同家

文禄元年正月十五歳少く

大権現しりけしり

同年二月名後屋沖陣しり伏奉
翌年名後屋しり病死歳十六

繩つら松まつ

傳ついで五ご節せつ

生なま國くに氏うぢ茂も茂も

突つとと横よこ田た基もと奈な東とうつつ

末すえ子こたたりり京きやう憲けん茂も茂も

くくみみくくしし

家いへ乃の級けい

立た竹たけ小こ虎こ

小こ幡はたとと總そう介け介けはははは級けいととゆゆづづ

是これ小こ幡はた氏うぢ

唐たう子し々々級けい者しやなり





